名作への散歩道

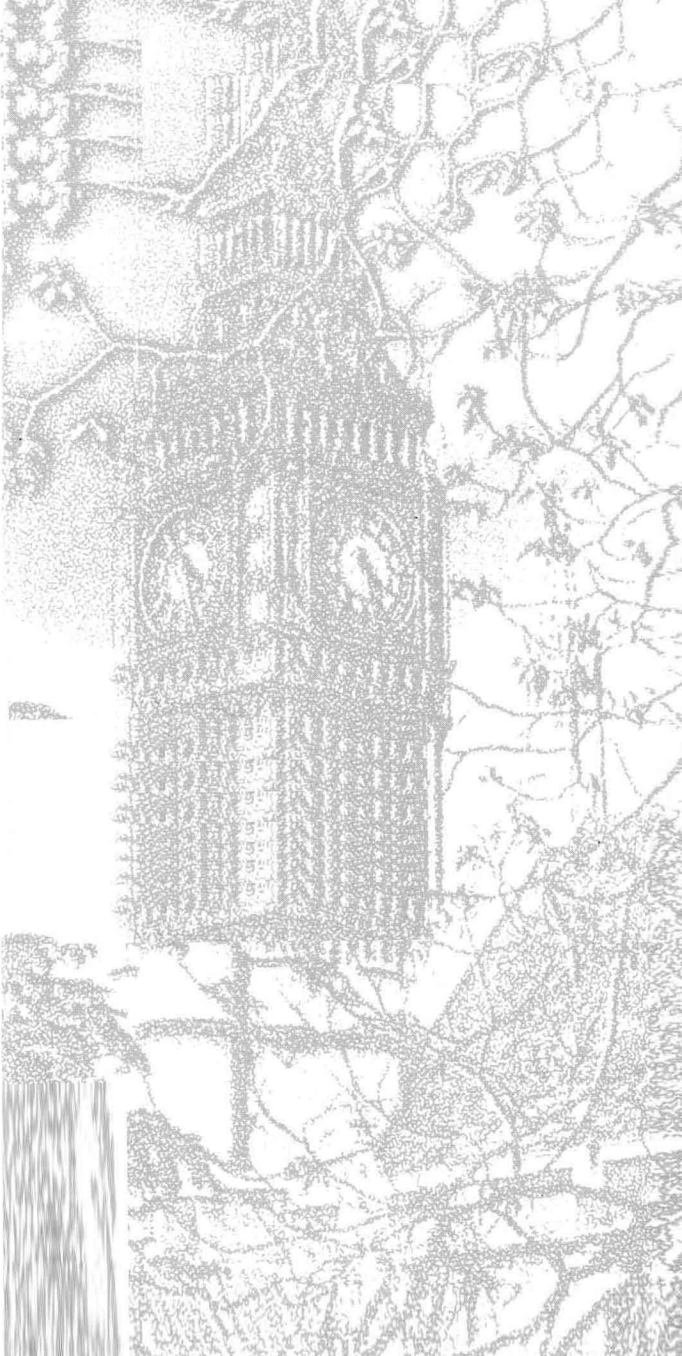
英米文学——イギリス篇①

監修—櫻庭信之
編集—庄子 信・東郷秀光・山本 証

英米文学——イギリス篇①

名作への散歩道

監修——櫻庭信之
編集——庄子 信・東郷秀光・山本 証



英米文学——名作への散歩道　イギリス篇①

1986年12月25日初版第1刷　定価1700円

監修者　櫻庭信之

編集者　庄子　信／東郷秀光／山本　証

発行者　山崎永子

本文組版
印刷所　三友社出版・電算写植部

発行所　**三友社出版**

〒112 東京都文京区音羽1-19-23 成美堂ビル

☎ (03) 946-0285　振替　東京4-61642

3098-00106-2780　落丁・乱丁はお取り替えいたします。

カバー・表紙装丁　塩沢美智子

英米文学——イギリス篇①

名作への散歩道

監修——櫻庭信之
編集——庄子 信・東郷秀光・山本 証

英文学の散歩道
——監修者のことば

櫻庭信之

『英米文学——名作への散歩道』シリーズの最終篇『イギリス篇』①を手にして思うことは、先に出た『イギリス篇』②の監修者である日高八郎氏がいわれたように、これこそはまさに「英文学の百花が繚乱と咲く花園への案内書」だということです。

私は今でも京都を訪れると、「哲学の道」をよく歩きます。そして日本の歴史や京の都を愛した文人たちに想いを寄せるのです。まだ若いころ私はハイデンベルクの大学とロマンの香りをたたえたネッカー川を見下ろす「哲学の道」をひとり歩きながら、「ヨーロッパ——文学の旅」の構想を練ったこともありました。またロンドンでは、ハイド・パークからケンジントン・ガーデンズに至る「花の小道」(Flower Walk)を歩くのが好きでした。そこには一年中色とりどりの草花が、ことに五、六月にはありとあらゆる草花や樹木の花が一斉に咲き乱れているのです。その「花の小道」を歩きながら私はシェークスピアの『ハムレット』に想いを馳せ、五月のバラに気が狂ったオフィーリアを思い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

出したりしていました。この「花の小道」は私にとっては「英文学の散歩道」でもあったのです。今ここに『名作への散歩道――イギリス篇』①を前にして、私は自分が歩いて来た英文学巡礼の旅を懐しく思い出しているのです。

読者のみなさんは今、英文学という花の散歩道の入口に立っているのです。そこには古英詩『ベーオウルフ』という七世紀ごろのイギリス最初の叙事詩から、十九世紀初期のジェーン・オースティンの『ノーサンガー寺院』に至るまでの、およそ千二百年にわたってイギリスの風土が育てて来た文学の花が、みなさんのお好み次第で、いつでもどれでも摘みとれるようにお待ちしているのです。その花の傍には、都留久夫氏を始めとしてその花を発見し愛し続けて来た専門家がいて、みなさんの質問に答えてくれる仕組みになっているのです。今迄にどこかでふとかいま見た花だけれども、もう一度ゆっくりと観賞してみたいと思われる花の前に立って、ご遠慮なく話しかけて下さい。歴史的に順々に見ていくのも結構ですが、たとえば、二番目の花「伝承バラッドの魅力」にお目が留ったならば、十五、六世紀に咲き誇ったバラッドという、無名の民衆が作り、歌い、口で伝えた歌謡文学の花の源泉についてお聞き下さい。そうすればこの花に魅惑された福吉瑛子さんが、学生のころ英文学史の講義で、若くて美しい外人女教師から受けた深い感銘について、美しい声でみなさんに語りかけて下さるのです。

このバラッドにさらに花を添えたのが演劇で、古典劇と宗教劇とが栄えて、イギリスはいよいよヘンリー八世とその娘エリザベス女王を迎えて、そこにルネッサンスの花を咲かせます。ジョン・スケ

ルトンはチョーサーとルネッサンスの詩壇を結ぶ重要な役目を果す詩人として登場しました。日本にはあまり紹介されていないこの諷刺詩人を塩田勉氏が「英ルネッサンスの詩人像」として、エドマンド・スペンサーの代表作『妖精の女王』とともに解説して下さると、続いて大学才士といわれたクリストファー・マーローとともに、エリザベス朝演劇の頂点ともいうべきシェークスピアの史劇、喜劇、悲劇が、日本のシェークスピア研究の権威日高八郎氏に続く滝沢、森本、清原の諸氏によって華やかに展開します。

この花畑は英文学の散歩道のハイライトともいうべきものです。お気に召すままにごゆっくりと逍遙して下さい。

次には清教徒革命時代を代表する盲目の詩人ジョン・ミルトンの格調の高い一大叙事詩『失楽園』が、滝沢氏によって紹介されます。学生時代にはなかなか読破できない大作ですが、この見事な解説がみなさんを魅力ある花園へと導くことでしょう。

次はジョージ王朝です。この時代には商人階級が栄えて、散文文学の中でも特に小説が勃興しました。まず写実文学のダニエル・デフォーの『ロビンソン・クルーソー』と、諷刺文学の奇才ジョナサン・スウィフトの『ガリヴァー旅行記』――この二つの有名な作品は、児童文学としても紹介されますが、その原典に接して初めてその真価がわかるもので、松本節也氏の解説でその神髄に触れていただきたいと思います。

これらに続いていわゆる四大小説家、これを車の車輪に喩えてFour Wheelsといいますが、ここ

ではリチャードソン、フィールディング、そしてスターンの三人（スモレットは除く）を紹介いたします。その代り伝記文学の傑作といわれるボズウェルの『サミュエル・ジョンソン伝』を選んでみました。ジョンソンは十八世紀イギリス文壇の大御所で、ジョンソン大博士といわれた博識の人物です。これらは櫻庭を除いてすべて新進気鋭の英文学研究家、加藤、相沢、岸の三氏によって見事に消化されております。

さて、この散歩道の最後を飾るのがロマン主義時代を代表する詩人たち、ブレーク、ワーズワース、コールリッジ、シェリー、キーツなどでありまして、特に『叙情民謡集』の著者であるワーズワースとコールリッジは、イギリスの文学史にロマン主義復興のきっかけをなした詩人として注目されます。この美しい花壇の案内者には、野崎、松田、風呂本、庄子の諸氏らが控えております。

そしていよいよ掉尾を飾るのが、十九世紀に入って輩出する女流作家の先駆をなす可憐なる才女ジェーン・オースティンです。これにはやはり女性の英文学研究家の山本博子さんがその任にあたります。

イギリス文学の散歩道にはまだまだたくさん、見残した美しい花があります。それらを観賞されるのはみなさんの今後の課題です。しかしこれだけ大急ぎで見て回っても、イギリス文学の常識は十分に得られることと信じます。最後に執筆者各位のご協力と、東郷秀光・山本証・庄子信の三氏、並びに三友社編集部の方々の長い間のご尽力に対し、深甚の謝意を表します。

一九八六年十一月

もくじ

英文学の散歩道
——監修者のことば ……櫻庭 信之 2

古英詩
『ベーオウルフ』 ……都留 久夫 10

伝承バラッドの魅力 ……福吉 瑛子 22

ジェフリ・チョーサー
『カンタベリ物語』 ……都留 久夫 34

ジョン・スケルトン
英ルッネサンスの詩人像 ……塩田 勉 46

エドマンド・スペンサー
『妖精の女王（フェアリー・クイーン）』 ……塩田 勉 57

ウィリアム・シェークスピア
『リチャード二世』……日高　八郎　70
ウィリアム・シェークスピア
『ヴェニスの商人』……滝沢　正彦　83
ウィリアム・シェークスピア
『ハムレット』……森本　弘幸　95
クリストファー・マーロー
『フォースタス博士の悲劇』……清原　孟　107
ジョン・ミルトン
『失楽園』……滝沢　正彦　119
ダニエル・デフォー
『ロビンソン・クルーソー』……松本　節也　131
ジョナサン・スウィフト
『ガリヴァー旅行記』……松本　節也　142

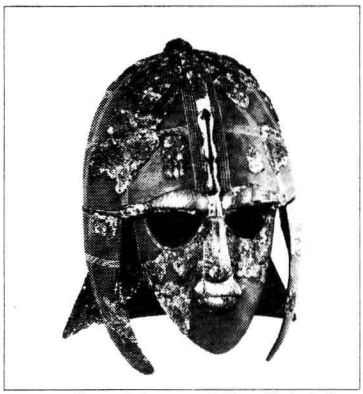
サミュエル・リチャードソン
『パミラ』……櫻庭　信之　154
ヘンリ・フィールディング
『トム・ジョーンズ』……加藤　一郎　167
ローレンス・スターン
『トリストラム・シャンディ』……相沢　敬久　179
ジェームズ・ボズウェル
『サミュエル・ジョンソン伝』……岸　英朗　191
ウィリアム・ブレーク
『無垢の歌』『経験の歌』……野崎　嘉信　201
ウィリアム・ワーズワース
「ワイ河再訪に際し、ティターン寺院より
数マイル上流にて作れる詩」……松田　憲　212

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ウィリアム・ワーズワース
『序曲』……野崎　嘉信　224
サミュエル・テイラー・コールリッジ
『文学評伝』……風呂本武敏　235
パーシー・ビッシィ・シェリー
「西風の歌」……庄子　信　247
ジョン・キーツ
「心なき乙女」……庄子　信　259
ジェーン・オースティン
『ノーサンガー寺院』……山本　博子　271
かいせつ……庄子　信　283

古英詩『ベーオウルフ』

都留久夫



アングロ=サクソン時代の武人の兜

英文学史はアングロ=サクソン人の古英語からはじまる。古英語文学の伝統は中英語の時代を経て近代の文学に受けつがれているが、その古英詩の代表作は『ベーオウルフ』である。

新約聖書の「使徒行伝」十七章に、使徒パウロがアテネのアレオパゴスで説教をするところがある。パウロはそこに「知られざる神に」と刻まれた祭壇を見つけ、これを手がかりとして、その神を示そうとキリスト教の神を説いている。その土地伝来の文化・宗教を使って伝道に用いる方法をキリスト

教ではよくおこなうが、イギリスにおいても教皇グレゴリウス一世（在位五九〇―六〇四）の教化方針は、異教ゲルマンの風習をそのままの形で転用することであった。ゲルマン人の樹木崇拝は十字架や、クリスマス・ツリーに利用し、春の女神エオストレの祭はキリストの復活祭に利用した。この態度は文学にも応用され、アングロ=サクソン人のために書かれた宗教詩は、ゲルマン人の異教文学の伝統によって描かれている。『ベーオウルフ』も同様にゲルマン英雄伝説を利用して、キリスト教の思想が語られたものである。現代の私たちがこれを読む時、そこにキリスト教思想とアングロ=サクソン人の根深いゲルマン民族性が混然とまざり合った一つの芸術空間が創出されている姿をみるのだ。

写本・詩法

『ベーオウルフ』の写本は一つしか残っていない。これは『コットン・ヴィテリウス　A・XV手写本』と呼ばれ、大英博物館に行けば、その図書室の陳列箱に飾られているのを見ることができる。縦約二十センチ、横約十センチほどの写本で『ベーオウルフ』のほか宗教詩『ジュディス』と三編の散文が含まれているが、その縁は焦げて崩れている。大英博物館に収納される以前、コットン卿の書庫にあった折、火災にあい、あやうく焼失はまぬがれたものの、周囲が焼け焦げてしまったものである。

この写本は紀元一〇〇〇年頃に書かれたものだが、原作『ベーオウルフ』がアングリア方言で書かれたと推定されている時代から、約二百五十年の時間を経たものと考えられている。『ベーオウルフ』

の作者についても、他の多くの古英詩同様、知られていない。今までの研究結果では、八世紀の前半にアングリア方言の地域、おそらくはマーシア王国の宮廷に関係あるキリスト教の聖職者によって書かれたものではないかと推考されている。原作ができ上ってからこの写本の書かれた十世紀の末に至るまで、その間何度も筆写が重ねられ、何人もの筆写者の手を経ており、その筆写者たちが、それぞれ異なったスペリングの癖を持っている上に、彼らの言語も違った方言だったので、転写の度ごとに綴りや文法的形態や語彙に多少の変更が加わり、現在の姿になったのである。現存の写本でさえも、前半と後半では筆跡が全くちがい、文法的な性癖も差異が認められている。この写本はウエスト=サクソン方言が主体になってはいるが、アングリア方言やその他の要素がかなり混入しているのだ。しかし原作の構成も長さも文章も、恐らく殆んどそのまま伝えられていると考えられている。

アングロ=サクソンの詩はゲルマン古来の伝統を受けついだ頭韻詩である。これは近代英詩のもとになったラテン系の脚韻とは異なり、一行の音節数は一定せず、行末の韻も踏まない。そのかわり行中の強勢のある語頭に同じ音を反復して使う方法である。一つの詩行は途中に「行間休止」(カエスラ)があり、前半と後半とに分かれて、通常は前半二個、後半に一個、頭韻をふむ単語があらわれている。『ベーオウルフ』の冒頭五行を見てみよう。

HWÆT, WĒ GĀR-DEna / in ȝeardaȝum
þēodcyninla / þrym ȝefrūnon,

hū ðā æþelinȝas / ellen fremedon.
Oft Scyld Scefinȝ / sceaþena þreatum,
monegȝum mæȝþum / meodosetla oftēah.

ああ！　我らは聞いた、過ぎし日の
槍で名高きデネ人の　王たちの栄誉、
この公達がいかに　武勲をたてたかを。

アングロ=サクソン時代の怪物図

シェアフの末裔シュルドは　敵軍より、
多くの部族より　酒宴の席を奪い取った。

一行目はȝ、二行目はþ、三行目はæ、eの母音、四行目はsc、五行目はmの頭韻を踏んでいることがわかる。『ベーオウルフ』八九―九八行に『旧約聖書』の物語を竪琴にあわせて歌人が語る場面があるが、『ベーオウルフ』もまた同様に竪琴にあわせて吟じられたのだろう。英国で頭韻詩法は、母語による詩作が復活した十四世紀には、中部地方で復活し、『農夫ピエルスの幻想』

や『ガウェイン卿と緑の騎士』などにも用いられている。

『ベーオウルフ』の詩の技法は他の古英詩にもあてはまるのだが、「変叙法」（ヴァリエイション）による繰り返しが多い。引用の三行目は二行目の繰り返しであり、四行目の後半と五行目の前半も反復である。同意語や同じ意味の句をいくつも重復することがアングロ=サクソン人の文学的好みの一つのあらわれである。そのため素朴だが創造力に富んだ同義語、合成語、ケニングなどがさかんに使われている。二行目の pēodcyninȝa と三行目の æþelinȝas は同義語である。この「王候」「英雄」を表わす語は『ベーオウルフ』の中だけで三十六語もあると、英語学者のイェスペルセンはその著『英語の成長と構造』（初版一九〇五）の中で列挙している。æþelinȝ, bearn, ċeorl, cniht, cyninȝ, ealdor, eorl, hlāford, þeȝn ……。

このほか「戦い」（十二語）「海」（十七語）「船」（十一語）などを表わす語も非常に多いが、これらの同義語から見ても、北海ゲルマン人が海と密着した生活をおくり、きびしい自然の中で戦いの生活をしていた様子をしのぶことができる。荒涼とした自然、きびしい冬、つらい海の生活、戦闘描写などアングロ=サクソン文学の中心的な素材だが、第十七歌（一一二五行以下）のきびしい冬が去って春が来た喜びを歌う個所は読者の胸を打つ。

一行目の ȝēar-daȝum (year-days)、二行目の pēod-cyninȝ (tribe-king)、五行目の meodo-setla (mead-benches) といった合成語はこの詩の一つの特徴で、クレバーは『ベーオウルフ』全語彙の三分の一、つまり千七十語が合成語だと言っている。Gār-Dena (Spear-Danes) の Gār- は Dena に付

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.